恐ろしい話

恐ろしい話

ちくま文学の森 7

筑摩書房

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

恐ろしい話 〈ちくま文学の森7〉

一九八八年六月二十九日 第一刷発行

編者 安野光雅（あんの・みつまさ）
森毅（もり・つよし）
井上ひさし（いのうえ・ひさし）
池内紀（いけうち・おさむ）

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八 〒一〇一―九一
電話東京二九一―七六五一（営業）
二九四―六七一一（編集）
振替口座東京六―四一二三

装本 安野光雅
印刷所 三松堂印刷
製本所 鈴木製本所

本書の定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。
©M. ANNO T. MORI H. INOUE O. IKEUCHI 1988 Printed in Japan
ISBN4-480-10107-1 C0393

「出エジプト記」より　……　文語訳「旧約聖書」　……　2

詩人のナプキン　……　アポリネール　堀口大学訳　……　5

バッソンピエール元帥（げんすい）の回想記から　……　ホフマンスタール　大山定一訳　……　15

蠅（はえ）　……　ピランデルロ　山口清訳　……　33

爪（つめ）　……　アイリッシュ　阿部主計訳　……　49

信号手　……　ディケンズ　小池滋訳　……　65

「お前が犯人だ」　……　ポー　丸谷才一訳　……　89

盗賊（とうぞく）の花むこ　……　グリム　池内紀訳　……　111

ロカルノの女乞食（おんなこじき）　……　クライスト　種村季弘訳　……　121

緑の物怪……ネルヴァル　渡辺一夫訳……127
竈の中の顔……田中貢太郎……139
剣を鍛える話……魯迅　竹内好訳……159
断頭台の秘密……ヴィリエ・ド・リラダン　渡辺一夫訳……187
▲
剃刀……志賀直哉……207
三浦右衛門の最後……菊池　寛……221
利根の渡……岡本綺堂……235
死後の恋……夢野久作……255
網膜脈視症……木々高太郎……285
▲
罪のあがない……サキ　中西秀男訳……315
ひも……モーパッサン　杉捷夫訳……327

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

マウントドレイゴ卿の死 …… モーム 田中西二郎訳 …… 341
ごくつぶし …… ミルボー 河盛好蔵訳 …… 383
貧家の子女がその両親並びに祖国にとっての重荷となることを防止し、かつ社会に対して有用ならしめんとする方法についての私案 …… スウィフト 深町弘三訳 …… 393
ひかりごけ …… 武田泰淳 …… 407
なぜ怖がりたがるのか？ 解説にかえて …… 池内 紀 …… 470

恐ろしい話

「出エジプト記」より　　文語訳「旧約聖書」

人を撃ちて死なしめたる者はかならず殺さるべし。もし人みずから画策むことなきに、神人をその手にかからしめたもうことあるときは、我汝のために一箇の処を設くれば、その人そこに逃がるべし。人もしことさらにその隣人を謀りて殺すときは、汝これをわが壇よりも執えゆきて殺すべし。

その父あるいは母を撃つ者はかならず殺さるべし。

人を拐帯したる者は、これを売りたるもなおその手にあるもかならず殺さるべし。

その父あるいは母を罵る者は殺さるべし。

人相争うときに一人石または拳をもてその対手を撃ちしに、死にいたらずして床につくことあらんに、もし起き上がりて杖によりて

歩むにいたらば、これを撃ちたる者は赦さるべし。ただしその業を休める賠償をなしてこれを全く癒えしむべきなり。

人もし杖をもてその僕あるいは婢を撃たんに、その手の下に死なばかならず罰せらるべし。されど彼もし一日、二日生き延びなば、その人は罰せられざるべし。彼はその人の金子なればなり。

人もし相争いて妊める婦を撃ち、その子を堕りさせんに、別に害なきときは、かならずその婦人の夫の要むるところにしたがいて刑せられ、法官の定むるところをなすべし。もし害あるときは生命にて生命を償い、目にて目を償い、歯にて歯を償い、手にて手を償い、足にて足を償い、烙きにて烙きを償い、傷にて傷を償い、打ち傷にて打ち傷を償うべし。

人もしその僕の一つの目、あるいは婢の一つの目を撃ちてこれを喪さば、その目のためにこれを釈つべし。またもしその僕の一箇の歯か婢の一箇の歯を打ち落かば、その歯のためにこれを釈つべし。

詩人のナプキン

アポリネール
堀口大学訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

ギョーム・アポリネール　Guillaume Apollinaire　一八八〇―一九一八　本名ウィルヘルム＝アポリナリス・ド・コストロヴィツキー。父はイタリア人退役将校、母はポーランド人で法王庁侍従官の娘、その私生児としてローマに生まれた。十九歳のときパリに移る。銀行に勤めたり猥本の編集に携わったこともある。軽妙奇抜な詩や短篇によって注目をあびる一方、絵画・彫刻にも強い関心をもち、ピカソやブラックを推奨、「立体派」を擁護するなど、二十世紀前衛芸術の旗手といった役割をはたした。「詩人のナプキン」は短篇集「異端教祖株式会社」（一九一〇年）中の一つ。

（原題　La Serviette des Poètes）

生活のどん底、芸術の極致に身をおいて、ジュスタン・プレロオグは画家だった。一人の女が彼と同棲していた。四人の詩人が彼を時々訪ねて来た。かわりばんこに、彼等の中の一人が、画室で晩飯の御馳走になっていった。画室の天井には、運命が、星のかわりに南京虫をはりつけた。

つまり、食卓では決して顔を合せぬ四人のお客が、この家にはあった訳だ。

ダヴィッド・ピカアルは、サンセエルの生れだった。彼はあの町によくあるように、基督教化した猶太人の後裔だった。

レオナアル・ドレエスは、肺結核にかかっていた。彼は一見して笑いださずにはいられないような滑稽な顔つきをして、彼の霊感を受けた生命をぺとぺと吐き出していた。

ヂョオルヂ・オストレオルは、不安な目つきで、古のエルキュルのように、巷に立って右すべきか左すべきかと瞑想していた。

ジャエム・サン・フェリックスは、たくさんな面白い話を知っていた。彼の頭は肩の上で、くるくると廻転るのであった、あたかも首が螺釘でとめてあるかのように。

そうして彼等が作る詩は、実に立派なものだった。

食事はつぎつぎにいつまでも続いた。そして同じナプキンが、順次に四人の詩人によって

用いられた。しかし誰も彼等に、そのことは告げずにいた。

*

そのナプキンが、だんだんに、よごれて来た。

ここには菠稜草の黒ずんだ汚点と並んで、鶏卵の黄身がくっついていた。そこには葡萄酒によごれた唇を拭いたあとがあり、また休止の状態にある、手の指がのこした五つの灰色のあとがあった。一本の魚の骨が、槍のように麻の布目を突きさしていた。隅の処には御飯粒がくっついたままで乾いていた。そして煙草の灰が処々を暗くした。

*

――ダヴィッド、あなたのナプキンはこれよ。」とジュスタン・プレロオグの恋びとは云うのであった。すると、

――ナプキンを買うことも考えなければなるまいよ。今度お金が出来た時に買う物のうちに、これも書きこんでおいとくれよ。」こうジュスタン・プレロオグは云うのであった。

――ダヴィッド、あなたのナプキンはよごれてるわ。このつぎにいらっしたら新しいのを上げましょうね。今週は洗濯屋の婆さんが来なかったんですの。」とジュスタン・プレロオ

グの恋びとは云うのであった。

——レオナアル、あなたのナプキンをお取りなさい。痰なら石炭箱の中へおはきになったらよいわ。まあ、何てあなたのナプキンはきたないんでしょう！　洗濯屋の婆さんが、洗濯物を届けて来たら、すぐに取替えて上げますわ。」とジュスタン・プレロオグの恋人は云うのであった。

——レオナアル、君が痰を吐いているところを写した肖像を、僕は是非一枚描いてみたいね。何なら彫刻に造ってもいいと思っている。」こうジュスタン・プレロオグは云うのであった。

*

——ヂョオルヂ、いつも同じナプキンばっかり上げていて、本当にお恥かしいわね。でもどうしたものか、洗濯屋の婆さんがさっぱり洗濯物を届けてくれないんですの。」とジュスタン・プレロオグの恋人は云うのであった。すると、

——さあ、食事を始めよう。」こうジュスタン・プレロオグが云うのであった。

*

――ジャエム・サン・フェリックス、あたしまたあなたにこの同じナプキンをあげなければなりませんの。今日はこれよりほかのが一つもないんです。」こうジュスタン・プレロオグの恋人が云うのであった。

すると画家は、食事が終りになるまで、詩人の話をいろいろと謹聴しながら、相手の首をくるくると廻させるのであった。

*

そうしている間に季節が移りかわってすぎた。

詩人たちは、代る代る、その同じナプキンを使って幾度か食事をした。そうして彼等の作る詩は実に立派だった。

レオナアル・ドレエスはいよいよますます滑稽な顔つきで彼の生命を吐いていた。そうしてダヴィッド・ピカアルも痰を吐き始めた。

毒のナプキンは、順々に、病気を伝染させていった。ダヴィッドについでヂョオルヂ・オストレオルとジャエム・サン・フェリックスが感染した。しかし彼等は何にも知らずにいた。

病院の汚れもののように、ナプキンには、四人の詩人の唇に上る血の汚点がついた。そうして食事はつぎつぎにいつまでも続いた。

*

秋の初めの頃に、レオナアル・ドレエスは彼の残りの生命をことごとく吐き出した。てんでに別々な病院で、女たちが逸楽に身を揺られるように、咳に身を揺られながら、他の三人の詩人も死んで行った、相前後して。そうして四人が皆、魔がついているのではないかと思われるような美しい詩を残していった。

人たちは彼等の死を食べもののためだとは云わずに、飢餓と昔ながらの身にしむ歌の罪に帰した。なぜというに、たった一つのナプキンが、そんなにわずかな間に、千古に絶する大詩人を四人も殺してしまうことが出来ようとは、誰も思わなかったから。

*

四人のお客さまが、つぎつぎに皆死んでしまったので、今ではナプキンはもう要らなくなってしまった。

ジュスタン・プレロオグの恋人は、それを洗濯物の中へいれようと思った。

「このナプキンったら、実際きたなすぎるわ、それになんだかこの頃では、いやな匂いがするようだ。」こう思いながら、かの女はナプキンの片隅を拡げて見た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co